『西鶴諸国はなし』研究史ノート（２）

――昭和20年以前の語彙考証と典拠研究――

宮澤照恵

目次

一、本稿の目的
二、戦前の典拠研究概観
三、典拠論の諸相とプライオリティー
　ア、明治・大正期
　イ、昭和初年代
　ウ、昭和10年代
　　①前半
　　②後半
四、典拠論をめぐる視座
　ア、写実性からフィクション性へ
　イ、作品評価と典拠論の乖離
五、典拠論とは何か

一、本稿の目的

先に『『西鶴諸国はなし』研究史ノート（１）[1]」（以下、「ノート（１）」とする）において、戦前における『西鶴諸国はなし』研究の流れを概観し、それを踏まえて作品評価をめぐる諸問題を論じた。本稿では典拠論に焦点を当て、引き続き諸問題を整理・検討しておきたいと思う。本稿の目的を列挙すれば、次のようになる。

1、今後に引き継ぐべき指摘を篩にかける準備として、埋もれている戦前の素材論・典拠論の成果を掘り起こし、時代順に整理する。

2、戦前の研究成果については、初出認識に誤りがある場合や初出が示されずに踏襲される例があることから、可能な限りプライオリティーを明確にする。

3、戦前の語彙考証・典拠論の各成果について、それぞれの意義と限界を筆者の視点から総括する。

キーワード…典拠研究、語彙考証、プライオリティー

（一三二）

4、1～3の作業の中で、各時代の思潮や作品評価のありようを浮き彫りにする。
5、研究史上、「リアリズムと結びついた典拠論」から「フィクション性に注目した典拠論」への筋道を明らかにする。
6、戦前の典拠研究における「作品評価と典拠論の関係」を考察する。
7、一連の作業の基本となる筆者の典拠観を示し、典拠認定基準の再考を提言する。

以上、各項目は緊密な繋がりを持つ。まず1～4を統合した形で年代順に論述し、次に5・6を通じて「視座の変化」を通時論的に捉え直し、研究史分析の切り口の一つとしたい。7は「現代への課題」として終節に位置づける。この問題は、これまでいくつかの咄を取り上げた際[2]に具体例に即して論じてきたテーマである。本稿では総論として試案を示すにとどめ、更なる具体例は別の機会に展開する予定である。

なお、引用文献については本文中では簡潔に記し、末尾にほぼ紹介順に書誌一覧を付すこととする。

二、戦前の典拠研究概観

論述に先立って、明治以降昭和20年に至る典拠研究の様相を俯瞰しておく。総じて戦前の典拠研究は、訓古注疏の流れを汲んだ語彙考証や考証随筆の形を取ることが多い。種彦や京山の考証随筆を継ぐと言い換えてもよい。西鶴語彙考証の機運は、初め露伴ら実作者による作品研究や校訂作業などを通じて高まる。たとえば、露伴「六十日記」に語彙考証関連の記事が認められる如くである[3]。大正末年から昭和初年代にかけては、「ノート(1)」で指摘したように、東京における三田村鳶魚らや京都における藤井乙男らによる『西鶴輪講』が古典解釈学を推進させた。さらに昭和10年代に至って真山成果が語彙考証の成果を挙げていく。『西鶴諸国はなし』の素材・典拠論も、こうした考証を中心とした解釈学の流れに即したものである。語彙考証や素材考証にとどまらない典拠研究の新たな波は、次節で述べるように昭和17年の後藤興善「『古今著聞集』と西鶴の説話」・鈴木敏也「草の種」によって、ようやく広がりをみせることになる。戦前の低評価[4]を反映して、典拠素材に関連した方面においても、『西鶴諸国はなし』を扱った論考は極めて少ない。校訂本の解説等を除く管見の論考は次の十五点であるが、このうち本稿で取り上げるものは5及び8～11を除く十点である。

1、明治30年7月　淡島寒月　「好色一代女（合評）」『めさまし草』
2、明治30年7月　森田思軒　「標新領異録」『めさまし草』
3、大正11年5月　鈴木敏也　「諸国咄」『近世日本小説史前』
4、大正13年11月　船越政一郎　「鴻池新田と文豪西鶴の大下馬」『難波津』10
5、大正15年3月　片岡良一　「懐硯と大下馬」『井原西鶴』

6、昭和３年５月　岩城準太郎　「西鶴の諸国咄と大和」『奈良文化』14
7、昭和４年５月　水谷不倒　『新撰列伝体小説史』
8、昭和８年９月　前島春三　「西鶴と『諸国咄』」『国語と国文学』10の９
9、昭和10年11月　近藤忠義　「大下馬ところどころ」『国文学誌要』
10、昭和11年２月　近藤忠義　「西鶴諸国咄論稿」『近世文学の研究』
11、昭和12年２月　近藤忠義　『日本文学原論』
12、昭和14年10月　重友　毅　「西鶴と秋成」『古典研究』４の10
13、昭和12年２月―13年１月、昭和18年１月　真山成果　「西鶴語彙考証」
14、昭和17年12月　後藤興善　「『古今著聞集』と西鶴の説話」『西鶴研究』２
15、昭和17年12月　鈴木敏也「草の種」『西鶴研究』２

次に、翻刻校訂本の施注に目を向けておく。先に「ノート(1)」の「研究史通観」において、戦前に刊行された『西鶴諸国はなし』の翻刻校訂本を年代に従って紹介したが、その中から注が施されたものに限って取り出せば、

1、大正２年　藤井紫影『西鶴文集　上』（有朋堂文庫）
2、昭和４年　土井重義『井原西鶴集』（新釈日本文学叢書）
3、昭和７年　山崎麓『西鶴文撰集』
4、昭和14年　近藤忠義『西鶴』（日本古典読本）

となる。『日本永代蔵』や『好色五人女』などと較べて、その数の少ないことに驚かされる。まずは、四本の位置づけを確認しておこう。

大正２年刊の『西鶴文集　上』では、『大下馬』本文に初めて注が施され、従前の翻刻校訂本に欠けていた巻三「紫女」、及び巻四「命に替る鼻の先」・「驚くは三十七度」・「夢に京より戻る」・「力なしの大仏」・「鯉のちらし紋」の計六章が新たに加わった。当時の『西鶴諸国はなし』の扱いから見れば画期的なものであったが、底本を四巻本に求めるなど[5]、テキスト自体いまだ未整備の状況であった。施注も、目録・序文は対象から除かれ、本文に若干の頭注があるというレベルにとどまる。

詳注が見られるようになるのは、昭和に入ってからである。昭和４年に出された土井重義『井原西鶴集』所収の『諸国はなし』は、東京大学蔵の霞亭旧蔵本（現霞亭文庫本）を底本としたもので、初めて五巻本をテキストとした点、及び詳しい頭注が施された点が注目される。本書により、『西鶴諸国はなし』の校訂注釈は、ようやく第二段階を迎えたことになる。続く昭和７年刊の山崎麓『西鶴文撰集』は、高等諸学校の国語教科書として編まれたアンソロジーで、『西鶴諸国はなし』からは巻二「男地蔵」・巻三「蚤の籠ぬけ」・巻四「形は昼の真似」の三篇が収録され、若干の頭注が施されている。

（二五）

昭和14年刊の近藤忠義『西鶴』は、知名度の高い『好色五人女』と並んで『近年諸国咄』・『西鶴自註独吟百韻』をも取り上げた意欲的な研究書である。「翻刻篇」では詳注が付され、「研究篇」では人間主義的読みを色濃く取り入れた作品論が展開された。ある意味で、『西鶴諸国はなし』の研究史上エポックをなした一書と言えよう。

以上、校訂本四本にはそれぞれ時代思潮や編集意図を反映した特徴があるが、何れも考証学に基づく施注である点は共通している。典拠に言及した注も見られるが、「作品評価を見据え方法論を加味した上で、典拠を指摘した」というよりも、「考証の延長上にあって、先行類話を指摘した」という性格のものと言ってよかろう。語彙考証と典拠の指摘とが渾然の体をなす明治以来の傾向は、戦前の典拠研究と諸注釈にほぼ通底している。語彙考証・典拠論・施注に亘って、その基本姿勢に乖離が見られないことから、次節で詳述する各論では三者を区別せず、公刊の順にひとまず同等に扱うこととする。

三、典拠論の諸相とプライオリティー

本節では、前節で紹介した素材や典拠に関わる諸論考・諸注釈を整理し、研究史上の位置づけを行うと共に、プライオリティー（初出）を明らかにしておきたいと思う。類話・伝承・典拠及び語彙に関する新たな指摘を取り上げる他、

・　表現に注目することによって、西鶴のねらいを炙り出そうとした指摘

・　語彙考証を通して事実や伝承に基づく西鶴の創作態度を裏付けようとする意図が窺える指摘

など、論者・校訂者の独自性が窺えるものを併せて掲出する。なお、必要に応じて触れることになる戦後の諸文献については、拙稿「西鶴研究史」[6]を参照されたい。論述にあたっては、便宜上

ア、明治・大正期
イ、昭和初年代
ウ、昭和10年代

の三期に分け、次の記号を用いる。

※　これまでの「典拠一覧」[7]に記載が見られず、本稿において新たにプライオリティーがあると判断するもの。
◎　これまでの「典拠一覧」で初出と認めているもの。
⇩　後の継承・発展。
⬍　後の反論・異論。
⬆　先行指摘からの継承。

ア、《明治・大正期》

文壇人主導による作品紹介の時期である。『西鶴諸国はなし』の校訂本文が四巻本に拠るものであったため、「刊年未詳」とされる状態が長く続いた。文壇人による典拠の指摘に見るべきものが含まれる。初めての施注本が大正2年に刊行された。

・明治30年7月　淡島寒月「好色一代女（合評）」（論考1）

※一の二「見せぬところは女大工」のヤモリをうち込む話は『醍醐随筆』から取る。

⬆　◎後藤興善（「『古今著聞集』と西鶴の説話」論考14）『古今著聞集』の二話を典拠と見做す。（後述）

⇩　◎宗政五十緒（「西鶴諸国はなしのあとさき」）　後藤説を踏襲。『醍醐随筆』の記事にも触れる。

⇩　宮澤照恵（「『西鶴諸国はなし』咄の創作―見せぬ所は女大工の構想をめぐって」）　後藤説を廃し、同様の奇談はいつの時代にもあるが、俳友中山三柳からの直談という形で情報を入手した可能性が高いとして、『醍醐随筆』の記事を重視する。

・明治30年7月　森田思軒「標新領異録」（論考2）

◎巻二の四「残るものとて金の鍋」は『続斎諧記』「陽羨鶯籠之記」（許彦の大銅盤）の翻案である。

⇩　水谷不倒（『新撰列伝体小説史』論考7）　神仙譚として扱う。

⇩　近藤忠義（『西鶴』校訂本4）他、諸注釈に継承される。

⇩　◎早川光三郎（「西鶴文学と中国説話」）、岸得蔵（「西鶴諸国はなし考―その出生をたずねて」）、◎井上敏幸（「『西鶴諸国はなし』攷―仙境譚と武家物」）、◎藤江峰夫（「西鶴の咄の種―『西鶴諸国はなし』中の三篇をめぐって」）など、考証方法の進展に伴い、森田説を継承発展させる形で、類話の指摘をはじめ西鶴の素材利用の方法や直接的素材源（書承関係）を追究する諸論考に発展していく。

厳密な考証手続きを踏んだものではないが、的確な指摘である。以後、『諸国はなし』の説話素材の中に、中国説話の流入を考慮する契機となった。中国種の怪異譚を取り入れた咄は、西鶴らしい翻案の跡が辿りやすい。漢籍の素養がある者にとっては、『伽婢子』などとは一線を画す様が、一目瞭然だった筈である。比較的早い時期から典拠として認識されていたと思われるが、典拠認識のレベルが西鶴の翻案方法まで立ち入ったものかどうかは未詳である。

・大正2年　藤井紫影『西鶴文集』（校訂本1）

『西鶴諸国はなし』の最初の施注であることを考慮し、当代の事象や風俗に関する常識の範囲内の解説も含めて、以下に具体例を掲出する。

一の一「公事は破らずに勝」豊心丹―西大寺より出す薬の名。
一の三「大晦日はあはぬ算用」徳乗―後藤徳乗名は光次、寛永8年10月13日歿す、年八十二、金工の名人。
一の六「雲中の腕押」比丘尼好―比丘尼の色を鬻ぐ者元禄時代にあり。

（二七）

二の四「残る物とて金の鍋」高安通ひ―業平が河内高安の女の許へ通ひしこと伊勢物語に見ゆ。
二の七「神鳴の病中」奈良もの―奈良刀は鈍刀として世に知らる。
三の三「お霜月の作り髭」浄瑠璃御前―矢矧の長者の娘にて牛若丸と契りしこと十二段草子に見ゆ。
三の四「紫女」時雨の亭―定家卿の閑居。むかし読みぬる本歌―続古今「人知れぬ袖の湊のあだ波は名のみさわげどよる舟もなし」を指すか。
三の六「八畳敷の蓮の葉」策彦―天龍寺の僧にて明に行きし人、天正7年寂。
四の一「形は昼のまね」井上播磨―貞享2年5月19日歿年54。
四の五「夢に京より戻る」朱座―朱の製造販売の特許を得た商人。
※四の七「鯉のちらし紋」鯉が人を生みし話は『奇異雑談集』にも見えたり。
⇩　校訂本2・◎4に継承される。

緒言に

彼の作は目前に見る所を写して、いまだ一部の趣向を構ふるにいたらず。されどその描く所は元禄時代の活世相なるを以って、彼の様に依って胡蘆を描き、徒らに陳套爛熟の美辞麗句を羅列する物語風の弊を蝉脱し――

（二八）

とあるように、藤井の西鶴論は写実性の評価を主軸としたものである。「写実を基調として、そこに俳諧的な修辞と諧謔風刺とを取り込むことによって、わが国の小説に新機軸を出した」、というのが藤井の西鶴理解である。それを反映して、施注には一の一・一の六・二の七・四の五など「元禄時代の世相や事象」を説明したものが多く、西鶴の事実に基づく創作態度を裏付けようという姿勢が明瞭である。二の四・三の三・三の四など古典素養の常識的事柄に対しても遺漏はないが、何れも明確な「典拠認識」を伴うわけではなく、本文の語彙説明の域を出ない。唯一、四の七「鯉のちらし紋」の「鯉が人を生みし話」について、『奇異雑談集』に見える類話を挙げている点に、説話素材への関心が垣間見られる。この類話指摘は校訂本2・4に継承され、後に写本『奇異雑談集』と本書との関係に注目させる端緒ともなった。戦後の継承・発展は**ウ①**（校訂本 4）の項に譲る。

・大正11年　鈴木敏也「諸国咄」（論考3）
表現上の手腕に注目し、転合化・俗化などの操作を自在な叙述力に求める。

・大正13年　船越政一郎「鴻池新田と文豪西鶴の大下馬」（論考4）
後世の鴻池新田が、四の七「鯉のちらし紋」の舞台「内助が淵」であることの紹介にとどまる。

イ、《昭和初年代》

研究者を主体とした新たな研究段階を迎えると共に、『新釈日本文学叢書』本・『日本名著全集』本など、テキストもようやく整備される。片岡良一による文芸論的な読みが影響力を持ち、『西鶴諸国はなし』の低評価が定着する。一方では、語彙考証が研究の一分野として成長し始める。こうした動向を反映して、この時期の典拠論は行文にそった伝承の掘り起しに向かい、成果を上げた。

・昭和3年5月　岩城準太郎「西鶴の諸国咄と大和」（論考6）

※二の三「水筋の抜け道」の若狭と二月堂との間に水の通いありという設定は伝承に基づき、女房殺しの場面は直接には『因果物語』や『百物語』による。伝説に思いがけないロマンスを結び付け、白粉くさい人情話を編み出した新しみを指摘。

⇩　通い水伝承についての指摘は、◎近藤忠義（『西鶴』校訂本4）他、諸注釈に継承される。

・昭和4年5月　水谷不倒『新撰列伝体小説史』（論考7）

※巻五の六「身を捨てて油壺」に見える姥が火伝説、及び巻一の四「傘のご託宣」冒頭の「掛作り観音貸し傘の由来」は、有名な地方の口碑である。

⇩　◎近藤忠義（『西鶴』校訂本4）他、諸注釈に継承される。

巻二の四「残るものとて金の鍋」が神仙譚に基づく。

⬆　（論考2）を継承。

仮名草子から南嶺まで近世小説史を扱った書で、『西鶴諸国はなし』に関する言及はわずかであるが、本書の特色を多方面にわたって指摘している。題材に触れた部分は数行に過ぎないが、姥が火、及び貸し傘伝承に関する指摘は初出と認められる。

・昭和4年9月　土井重義責任校訂『井原西鶴集』（校訂本2）

前年代の藤井紫影『西鶴文集』に見られない施注のうち、独自性が窺えるものを以下に列挙する。多くが諸注に継承される。

※序　寝覚の床―『奇勝一覧』の記事（『丙寅紀行』の詠歌など）により、浦島太郎との繋がりを考証。
⇩　岸得蔵（『西鶴諸国はなし』考―その出生をたずねて」）の序文考証へ発展。

※一の二「見せぬ所は女大工」恵比寿大黒殿―「恵比寿大黒は共に福の神とせられ、多く商家にこれを祭る」として違和感・諧謔味を示唆。

※一の五「不思議のあし音」公冶長―孔子の弟子である公冶長の雀伝説を紹介。

（二九）

※一の六「雲中の腕押」海尊・熊井太郎・亀井―「後に義経と共に蝦夷に下る」伝承を紹介。
※一の七「狐四天王」諸国の女の髪を云々―寶（寛）永14年頃の髪切虫の出現話を『寶蔵』より紹介し、この巷談を狐に作り変えた行文とする。
三の五「行末の宝舟」狐の渡り初めて云々―「いわゆる神渡り也」として、諏訪明神の使狐の所為とする伝承の由来を説明。
※四の三「命に替る鼻の先」杓子天狗―「僧侶の化して天狗となるの伝説古来甚だ多し」として、『沙石集』・『本朝神社考』・『閑田耕筆』などを挙げる。類話として、『甲子夜話』にある喜多院の弟子のすりこ木天狗を紹介。
五の一「灯挑に朝顔」露地―暁の茶事の次第、露地入りの時間を示して、当該挿話が愚か者譚の行文であることを示唆。

施注語彙数は『西鶴文集』の数倍に及ぶ。全体に、本文理解よりも語彙考証そのものが目的化しがちな傾向が見られる。一部誤認があるものの、『和漢三才図会』・『嬉遊笑覧』・『擁州府志』・『貞丈雑記』といった基本的な参考資料を引用した詳注が付され、前年代の『西鶴文集』（校訂本1）に比して語彙考証・風俗考証などが前進している。章によって施注方針に揺れがあるが、総じて伝承や類話の紹介に意欲が見られ、初出の指摘が散見される。中で義経主従や杓子天狗に関する伝承の指摘は、作品構想を考える上で有益である。ただし、一の七の施注は本文当該箇所の行文のみを問題にしたもので、一話の創作方法全体に及ぶ評言ではない。

・昭和7年2月　『西鶴文撰集』（校訂本3）

「研究・批判の科学的方法は、同時代の社会の理解を第一とする」という立場から、「自習の便に」社会風俗を中心とした若干の語彙注が付されるが、典拠・方法にわたっての新見は特には見られない。

ウ、《昭和10年代》

前年代に引き続いて、書誌研究や語彙考証など基礎的研究が進展した時期である。作品論では、前年代の「低評価」を切り崩すべく、昭和14年近藤忠義が「町人社会の解放の文芸」という視点を打ち出した。更に昭和17年には、野間光辰が「はなしの方法」という切り口を提示した。こうした作品を見直す新たな評価軸は、次節で述べるように必ずしも典拠論と連動していたわけではない。昭和17年には典拠論の新たな成果として、「素材の組み合わせとフィクション化」という創作方法に踏み込んだ認識が見え始める。

①　前半

・昭和14年　近藤忠義『西鶴』（校訂本4）

前年代までの校訂本に見られない施注のうち、独自性が窺えるものを、発展・異論を併記する形で以下に列挙する。

※序　「近江の国堅田に七尺五寸の大女房もあり」には当代の見世物の裏づけがある。
⇩　岸得蔵（『『西鶴諸国はなし』考―その出生をたずねて」）の序文考証に発展。
※一の一「公事は破らずに勝」西大寺の豊心丹の方組―『擁州府志』により太鼓の書付（事実の裏づけ）を紹介。
※一の二「見せぬところは女大工」ヤモリの怪異は、浅井了意『伽婢子』など古来和漢ともに類話が多い（典拠認識は特にない）。話の本筋は土ぐも伝説と同工であるが、世間は広く婦人の大工もあると言ふ所に興味がある。
⇩　◎堤精二（『『近年諸国咄』の成立過程」）の『伽婢子』を本説とする仮説に発展。
⇩　◎森山重雄（「咄の伝統と西鶴」）の土ぐも説話原拠説、◎長谷川強（「西鶴作品原拠臆断」）の土ぐも退治説話原拠（そのやつしであるとする）説、何れも近藤による施注の延長上にある。
⬆　※宮澤照恵（『『西鶴諸国はなし』咄の創作―見せぬ所は女大工の構想をめぐって」）の土ぐも説話原拠説否定、並びに女大工虚構説。
※一の三「大晦日は合はぬ算用」十両の上書きの趣向は当代の薬の上包みの書きようをもって洒落たもの。
⇩　同趣向の先行例として、『可笑記』巻二の大江文平の話（◎重友毅『『西鶴諸国咄』二題」）、『一休諸国はなし』二の六や『秋の夜の友』巻三（◎岡雅彦「西鶴名残の友と咄本」）が報告される。類似趣向の具体例が加わることで、笑話の趣向類型があったという認識が広がり、近藤の読みが補強された。
※一の六「雲中の腕押し」義経の容貌描写が伝承を踏まえたものであることを指摘。
◎この話は『剪燈新話』から『伽婢子』に繋がり、更に『西鶴諸国はなし』にきたと思われるが、『伽婢子』五の二や『狗張子』一の三などと比較して西鶴は近世的。
⇩　直接には野田寿雄（『西鶴諸国はなし』）の施注に踏襲される。
⇩　『剪燈新話』への注目は◎笠井清（「西鶴の剪燈新話系説話」）へ、『伽婢子』との関係は◎堤精二（「近年諸国咄の成立過程」）へと発展する。
◎二の三「水筋の抜け道」若狭と二月堂との間に水の通いありという設定は伝承に基づく。
⬆　岩城準太郎（「西鶴の諸国咄と大和」論考6）に既出。
二の四「残るものとて金の鍋」『続斎諧記』の翻案としながら、日本風な翻案の跡を探り、生馬仙人を当てはめた。
⬆　森田思軒（「標新領異録」論考2）からの発展。
◎三の四「紫女」『剪燈新話』の牡丹燈記や『伽婢子』中の諸

（三一）

編（三の三、二の三、七の四）と同巧。紫女とは「紫姑」から思ひついて名づけたものであらう。

⇩　戦後、類話の指摘及び「素材と方法」の深化が、江本裕・堤精二・冨士昭雄らによって推進される。井上敏幸は謡曲など漢籍によらない典拠を探る。「紫は狐の異名」は継承される。

◎四の五「夢に京より戻る」金光寺の藤伝承が『堺鑑』にある。伝説の近世化を指摘。

※四の六「力なしの大仏」岩飛び・滝落としが事実に基づく。

⇩　真山成果（「語彙考証」論考13）へ発展。

⇩　宮澤照恵（「『西鶴諸国はなし』大下馬の原質（一）」）事実から次第に軽口ウソ咄に持っていく手法を指摘。

◎四の七「鯉のちらし紋」類似の説話として、『新釈』（校訂本2）の挙げた『奇異雑談集』以外に、『摂陽奇観』・『浪花のながめ』をあげる。⬆校訂本2からの発展

⇩　◎江本裕（「西鶴諸国はなし――説話的発想について」）巷説として狂歌を紹介。

⬆　※宮澤照恵（「『西鶴諸国はなし』大下馬の原質（二）」）西鶴の作為・素材の取り合わせに注目、一話を軽口ウソ咄と捉える。

※五の三「楽しみの鱈鮎の手」麻姑仙人に関する注を付す。

⬆　※宮澤照恵（「「楽しみの鱈鮎の手」の素材と方法」）縁起譚・仏教説話のモチーフを架空の鱈鮎に

（三二）

まつわる奇譚に転換した、「俳諧の方法」と「小説構成意識」が結びついた一篇とする。

以上、前代の施注に較べると西鶴の創作態度への留意が見え、各話の末尾には、後続文学への影響や主題などに触れた寸評が備わる。当該書の類話・伝承に関する指摘を取り上げて、近藤施注の特質を確認しておこう。類話に関する指摘は、以下の三点が初出である。

・「女大工」に見えるヤモリの怪異には類話が多い。

・「紫女」は、『剪燈新話』の「牡丹燈記」や『伽婢子』中の諸編（三の三、二の三、七の四）と同巧。

・「鯉のちらし紋」の類似の説話に、『摂陽奇観』・『浪花のながめ』がある。

これらは、明確な典拠意識に基づいて博捜・吟味した上での成果というよりも、寓目した先行類話を拾い上げたものと言ってよかろう。怪異世界の利用に中国説話の影響を見た「紫女」に関する指摘は、書承関係を厳密に立証したものではないが、傾聴に値する。

伝承の指摘では、「諏訪湖の渡り初め」・「金光寺の藤」・「義経の容貌」・「姥が火」などの施注に進展が見られる。ただし何れも、典拠追究の成果というよりは、本文に見える地名や伝承についての語彙考証というべきものである（近藤による伝承資料や地誌類などの指摘は妥当で、後続の研究に継承されている）。類話・伝承への言及は総じて、「事実を踏まえた創作である」とした大正期の研究の延長線上にあり、西鶴が取り入れた「諸国のはなし（題材）」への関心が顕著である。その解明のために訓古注釈の方法を用い、語彙

考証を通して新たな類話に気付く、或いは事実に基づく記述であることを確認・解明する、という行き方と言えよう。裏返せば、本書を「事実や伝承を集めた説話集」と捉える傾向があるわけで、典拠注を検証する限りでは、西鶴独自の虚構作品という認識が十分に芽生えていたとは考えにくい。とは言え、伝承を利用した咄には「近世化」が施されているという指摘があり、虚構化に対する意識は皆無ではない。一言で言えば、「訓古注釈の方法」を基盤とした中で「創作態度に重点を置く姿勢」を志向しているものの、いまだ十分には成長していない観がある（同書の俳諧性に繋がる指摘や作品評価については、次稿「戦前の研究史ノート（3）」で扱う予定である）。なお、近藤自身の展開として、五の五「執心の息筋」の典拠を『太平広記』巻百二十「徐鉄臼」とする指摘（昭和35年11月「西鶴大下馬の原話一、二話」『文学』）がある。

・昭和14年10月　重友毅「西鶴と秋成」(論考12)

同じく『剪燈新話』二の四「牡丹燈記」の系統を引く、『西鶴諸国はなし』三の四「紫女」と、『雨月物語』三の二「吉備津の釜」との創作法の差異を論じたもの。典拠認識は、『『奇異雑談集』・『伽婢子』の後を承けて西鶴が異国の怪談を取り入れたもの」という域を出ないが、素材を出発点として西鶴の創作方法に目を向けた点が注目される。「紫女」の特徴として、原説話の構成の簡略化と当世化及び現実性を指摘。怪異を扱いながら徹頭徹尾明るさに終始すると説く。

・昭和12年2月―昭和13年1月、昭和18年1月　真山成果「西鶴語彙考証」(論考13)

※序　「豊後の大竹」が事実に基づくこと、「頼朝の小遣い帳」が自筆日記残缺の伝承によることなど、考証を通じて事実に基づく行文であることを確認。

⇩　岸得蔵（『『西鶴諸国はなし』考」）の序文考証に発展。

※巻四の四「驚は三十七度」の「友呼び雁」、巻四の六「力なしの大仏」の「岩飛び」、巻五の二「恋の出見世」の「駿河の本町」、巻二の七の「火神鳴・水神鳴」、一の六と関連のある「弁慶の借状」、巻五の四「闇の手形」に登場する「木曽の麻衣」についての語彙考証を掲載。

②　後半

・昭和17年12月　後藤興善『『古今著聞集』と西鶴の説話」(論考14)

◎一の二「見せぬ所は女大工」の典拠は、『古今著聞集』巻二十の連続する二つの話である。

⇩　井上敏幸『好色二代男　西鶴諸国はなし　本朝二十不孝』(『新日本古典文学大系』)、宗政五十緒『井原西鶴集(2)』(『日本古典文学全集』)など、諸注釈に継承され定説化する。

⬆　宮澤照恵（『『西鶴諸国はなし』咄の創作―「見せぬ所は女大工」の構想をめぐって―」）『古今著聞集』の刊行が本

書に遅れること、また『古今著聞集』と『宇治拾遺物語』の抜粋である『昔物語治聞集』も、刊行時期からみて本書執筆時に参照するのは不可能である、として後藤説を退けた。

◎一の七「狐四天王」の化け狐が礫を打つ話は、『古今著聞集』巻十七変化二十五によったか。

典拠として『古今著聞集』に注目した最初の論文で、日本の先行説話集に目を向けさせ、単なる類話の指摘を脱して創作契機や方法に及んだ典拠研究の嚆矢として注目される。ただし、前述の如く筆者は後藤の書承論に反対の立場である。（なお、後藤は戦後も「西鶴説話の一考察――狂言「六人僧」から」（昭和24年『復刊西鶴研究』2）で、一の七「狐四天王」の報復譚構想は狂言『六人僧』によること、狐が通る人を丸坊主にするという民間説話に『加無波良夜譚』巻二十「強情な狐」があることを指摘し、典拠から構想に及ぶ論を展開している）。戦後には、後藤の後に続く成果が見られた。すなわち、野間光辰の提唱した「咄の方法」を進めた民間伝承・説話の見直しの機運の中で、先行説話の洗い直しが典拠論を活発化させ、成果をあげることになったのである。さらに、読者と共通の話題（生馬仙人・姥が火・内介が淵他）を置きながらそこから飛躍していく方法は、西鶴流の咄の創作方法であることが共通理解となっていった[8]。

（三四）

・昭和17年12月 鈴木敏也「草の種」（論考15）

◎三の三「お霜月の作り髭」の「作り髭」は、自然な悪ふざけとするには飽き足らない、「報復甘受型」の狂言「六人僧」を想起させるものがそこには感受される。

⇩ ◎後藤興善（「西鶴説話の一考察――狂言「六人僧」から」）鈴木の指摘した狂言「六人僧」の坊主にする強戯れは、より直接的には一の七「狐の四天王」の報復譚構想に繋がる、と見る。

「西鶴の作為が加わる」と論者が看取した部分に注目し、その趣向の拠り所について試論を提示し、素材とその利用法に目を向けた論である。語彙考証を超えて、西鶴の創作方法に及んだものと言えよう。

四、典拠論をめぐる視座

ア、写実性からフィクション性へ

西鶴作品の中に「写実性」を発見したことが、明治の西鶴復興に寄与したことは改めて述べるまでも無い[9]。その後「リアリズム」は、西鶴論に不即不離のキーワードであり続けた。リアリズムの内実は、時代思潮と評価基準の変容に従って様々に姿を変え、質的変

化を遂げるのである。『諸国はなし』は題材に依存した諸国奇談集と見做されたため、その評価は、「リアリズムの変容」の影響をより直接的に受けることになった。西鶴の虚構作品に「リアリズム（実事らしさ）を発見する」、という本来の評価があり、そこから、書かれた奇談を「事実と見做す」風潮へと変化していく。並行して、昭和10年代の歴史社会学派的な人間主義を標榜する立場からは、現実主義者西鶴が強調され、「近代的人間像を冷静に観察し形象化した西鶴は、近代的人間である」という評価と結びつく。戦後昭和40年代以降、奇談集における西鶴の虚構性に注目が集まるようになると、「リアリズムを感じさせる虚構の手法」に目が向くようになる（リアリズムの諸相を跡付ける作業そのものは、本稿の範囲を逸脱するため、稿を改めて行う予定である）。ここでは、上述したリアリズム観の変化を視野に入れた上で、『西鶴諸国はなし』は現実に起こった奇談や珍談の見聞録である」とするリアリズムと結びついた実証的な典拠研究から、「作品の虚構性に注目した典拠研究」へと関心が移っていく筋道を、確認しておきたい(10)と思う。

前節で述べたように、大正２年藤井紫影『西鶴文集』（校訂本１）の施注は、当代の世相や事象に関する語彙説明に力点が置かれており、事実に基づく創作であることを裏付けようとする立場が明瞭である。緒言において、「目前に見る所を写して、いまだ一部の趣向を構ふるにたらず。」（前掲）と断じていることからも、作品のフィクション性に対してはほとんど関心が向いていなかったと考えられる。修辞や風刺・諧謔に新風があると見るものの、基本姿勢はやはり写実性（見聞そのものの説話化）を評価する立場である。校訂注釈本類を見る限りでは、この傾向は基本的には戦前を通じて変化がない。作品論に新し味を見せた近藤忠義『西鶴』（校訂本４）においても、先に触れた通り、基本認識は「事実に基づく奇談集」というもののように思われる。「事実に即した説話集である」、という方向からの典拠探しが、実証的な典拠研究の内実であった。意識するしないに拘らず、題材のおもしろさ・珍しさに作品の価値を見出す、という題材主義の作品観は、根が深かったと言えよう。

それでは、『諸国はなし』の虚構性については、どのように扱われてきたのだろうか。『西鶴諸国はなし』における西鶴のフィクション性への注目は、題材の中に中国種のものが含まれていることへの気付きから始まると考えられる。漢詩・漢文が教養人の常識だった時代には、二の四「残る物とて金の鍋」・二の五「夢路の風車」・三の四「紫女」などの神仙譚や怪異譚に、中国小説の面影を看取するのは自然であったろう。文献に残る明治以降の指摘では、明治30年７月の森田思軒「標新領異録」（論考２）が最も早い。詳細な比較研究や翻案・手法の分析が行われたわけではなく、寓目した中国小説に類話・類想を見出した、というところでもあろう。だが、中国種の先行類話への気付きは、西鶴の素材渉猟の広さと自在な翻案の手腕への気付きをも、同時にもたらした筈である。

「虚構性への関心」という側面からすれば、中国種の翻案が混じるという発見は、次に、本文に取り入れられた「伝承の発掘・考証と、西鶴による当世化の指摘」という形でその広がりを見せる。管見の範囲では、昭和３年５月の岩城準太郎「西鶴の諸国咄と大和」（論考６）が早い時期のものである。かいつまんで言えば、「若狭の

通い水」という伝承説話に、西鶴は「悋気・幽霊・殺し」の要素を結びつけ、首尾の整った新しい話を作り出した、というのである。厳密な考証を経た構想論というよりも、古都奈良を舞台に近世的な白粉の匂いを取り込んだところに、新しみを読みとった論文である。それまでの語彙考証や類話の指摘の域を出なかった典拠研究から一歩踏み出し、西鶴の作品構想と結びつけた研究の早い時期の成果と言えよう。

こうした伝承の発掘は進展を見せるものの、それ以上の虚構性・フィクション化に踏み込んだ研究が表に出るのには、昭和10年代後半を俟たねばならない。語彙考証が学問分野として自立していき、学問イコール実証という機運が高まったことを始め、リアリズムの捉え方の変容、作品評価の毀誉褒貶、時代思潮にそった読みの浸透など、その要因はいくつか考えられる。ともあれ昭和10年代前半まで、西鶴の作為や方法を注視しようとする虚構性の追究は、「伝承の発掘と当世化の指摘」というレベルから先には進まなかったのである。

イ、作品評価と典拠論の乖離

書かれた内容が事実に基づくと見做す典拠考証が進むと、次には考証結果と作品理解の乖離、という問題が生じてくる。この点に関し、先に「ノート(1)」において次のように述べた。

訓古注釈の方法に沿った語彙考証は、解釈を定める上で不可欠なものであるが、同時に事実を探索する使命を帯びる。「事実に基づく創作」という作品理解や、露伴以来の「写実性」評価（注9参照）が自閉に向かったことと通底する面を持つ。現実との密着を前提とする考証学は、後の、より専門分化していく過程では、創作方法や作為を重視する作品研究とは立場を異にしていくことになる。

（三六）

語彙考証・典拠研究と作品論との間の乖離は、山口剛の「低調作品説『名著全集解説』」、近藤忠義の「人間主義思想の展開」などに垣間見られる（ノート（1）三節参照）。例として、典拠研究の一つのエポックとなった近藤の典拠注（校訂本4）を見てみよう。前節で述べたように、近藤の典拠の指摘は、「事実や類話に限定された」段階にとどまっている。すなわち、本文中に用いられた語句・伝承・挿話・趣向などを出発点とし、それらが実在したこと、あるいは先行書に類例があることを、考証学の手続きによって突き止めることに終始しているのである。「解釈を定める一助としての施注」と言ってしまえばそれまでであるが、一方で、頭注スペースには一話ごとに短評が掲げられ、作品論に対しても意欲的であることに注意したい。短評は、近藤による「新しい読み」の提唱である。同書の評論篇で言う「新しい町人の知的欲求に答えようとする」作品で、そこに「封建的な固陋な見解に対する激しい抗議を読み取ることができる」という言辞に共通する姿勢がそこには見られる。

そうであれば、素材観・典拠観にも何らかの新し味があってもよいのではないか、という気がしてくる。要するに、評論篇の主張に

比して、施注には「作者主体の意図にそった典拠解明意識」が伴っていないことへの疑問である。[11] 近藤の場合、伝統的な注釈の方法を駆使したテキストの読みと、時代思潮を反映した歴史社会学的な作品論とが必ずしも融合してはいない。そこでは、「西鶴の意図」について新しい歴史社会学的な解釈を挙げながら、「周知の題材から新たな咄を創作する」という西鶴の虚構化について注意を払わない、という現象がおきている。（仮に、「語彙考証によって、事実に基づく記述であることを解明する」という姿勢に徹し、その成果によって、近藤の言う「新しい解放された人間意識」という作品評価に到達することがあるとしよう。その場合、評価は題材や表現描写にのみ向けられ、その域を出ないことになるのだろうか）。リアリズムに貫かれた奇談であっても、作品自体はあくまで虚構であることは明白だったのではないか。[12] 近藤の言う「新しいものの見方」が西鶴にあるとすれば、それは、「現実的な新しい題材の選択」にとどまるものではなく、作品の構想や方法と不可分な新しさである筈だ。繰り返すようではあるが、近藤の主張する新しい読みと、本文施注に見られる考証学とがどのように結びつくのか、筆者にはその筋道が不分明に思われる。

近藤の仕事を通じて現代に通じる課題を挙げれば、「作品論と典拠論との有機的結合」をどのように実現させるか、という点であろう。読解の手助けとしての注釈は、あくまで作品に表れた語句の解説である。しばしば西鶴は、「あらはにしるすまでもなし、知る人は知るぞかし」とばかりに暗示したまま、その先は読者に委ねて突き放す表現を用いる。そうした作品の解釈には、作者の思考回路に踏み込んだ注釈が必要であろう。的を射た注記は、表出されなかった言外の企みを炙り出す筈である。そこに、典拠解明の積極的意味があり、そこに新しい読み、新しい作品論が生まれる余地が残されていると考える。

以上、伝統的な注釈の方法によるテキストの読みと、時代思潮を反映した作品論とが融合されなかったことが、典拠紹介の記述と作品主題論との乖離・不統一という形で露呈している近藤の例を挙げた。作品の新たな面を掘り起こそうとする際、同様の危うさは常について回ることを銘ずる必要があろう。

五、典拠論とは何か

これまで戦前の典拠論を整理検討してきたが、まとめに代えて「典拠論とは何か」という基本問題に触れておきたい。具体的に作品に即して語るのでなければ意味をなさない問いであるが、冒頭で断ったように、ここでは総論のみを述べておきたいと思う。

『西鶴諸国はなし』の典拠論が紆余曲折を経てきた理由の一つに、「諸国奇談集」という形態を取るがゆえの特殊性があったと思われる。題材のおもしろさ・珍しさに依拠した説話であると安易に考えられがちだったこと（すなわちフィクションとしての説話という認識が育っていなかったこと）、一篇が非常に短くストーリー性が希薄であったこと、他作品に較べてフィクション化のありようが摑みにくいことなどである。西鶴の「写実性」という特質も誤解に一役買っていたことは、先に指摘したとおりである。だが、典拠研究の

進展に伴い、様々な素材が一つの咄の中に溶け込み、構成を担っていることが、次第に見えてきたように思う。しかも、その利用方法が多様なのである。私に気付いたいくつかのパターンを挙げてみる。

一つの素材から想像もしなかったような思いがけない展開を導く、意味を少しずつずらしながら別の文脈に発展させていく、素材や本説を隠して謎を仕組む、周知の話型や世界を利用しながらもとの咄を成り立たせていた論理（約束ごと）を引っ繰り返してしまう、素材の組み合わせの意外性を楽しむ、或いは江本裕が指摘してきた（注8参照）ような周知の伝承からの飛躍を仕掛ける――こうした素材の利用方法に加えて、西鶴は完結した咄としての自立を確保するために、一話ごとに全体を貫く論理を用意している。それは、本説に近いものであったり話型であったり、行間に隠されたキーワードであったり人物であったりする。そうした西鶴の咄ごとの企みを見抜く試行と論理構築とが、筆者の考える典拠論である。

それらは、本文に表現された語句の考証とは異なる。また、付合を駆使して連想の跡を解明しようとする試みや、語句の類似性の数量的処理とも異なる。また、類話の指摘もそれだけでは典拠論にはなるまい（笑話にせよ怪異話にせよ、筋立ての共通する咄は多いわけで、それらを例示するだけでは、西鶴の咄を型に当てはめる表層的議論で終わることになろう）。――ある意味で手掛りが摑みにくい、それだけに「発見された咄の論理」と「論者の読み」との間の主体的往復作業が不可欠である。素材の一つ一つを典拠として認定することが、論者自身の作品の読みと整合性を持つのでなければ、意味がない。本稿で取り上げた戦前のいくつかの例は、教訓になる箸である。最後に蛇足として、「語彙考証」は作品を同時代の読みに即して理解享受するための道具であり、各話の「典拠」とは分けて捉える必要があることを付け加えておきたい。

（三八）

注

(1) 宮澤照恵「西鶴諸国はなし研究史ノート（1）」『北星学園大学文学部北星論集』47　平成19年3月

(2) 以下の各論考において、咄に即した素材と方法を論じ、筆者の典拠観を提示した。

宮澤照恵「楽しみの鱆鮎の手の素材と方法―『西鶴諸国はなし』の研究」『国語国文研究』82　平成元年3月

宮澤照恵「『西鶴諸国はなし』「楽の男地蔵」の素材と方法」『北星学園大学経済学部　北星論集』29　平成4年3月

宮澤照恵「『西鶴諸国はなし』咄の創作―「八畳敷の蓮の葉」の構想と素材」『北星学園大学文学部　北星論集』36　平成11年3月

宮澤照恵「『西鶴諸国はなし』大下馬の原質（一）」『江戸の文事』ぺりかん社　平成12年4月

宮澤照恵「『西鶴諸国はなし』大下馬の原質（二）―軽口咄の方法」『北星学園大学文学部　北星論集』39　平成14年3月

宮澤照恵「『西鶴諸国はなし』咄の創作―見せぬ所は女大工の構想をめぐって」『北星学園大学文学部　北星論集』43―1　平成17年9月

(3) 竹野静雄は、『近代文学と西鶴』（昭和55年5月　新典社）において、露伴が門下生の西鶴研究に対する指導を行ったことや、西鶴輪講の企てのあったことを指摘している。更に、「六十日記」明治32年3月28日の条に、鯛の江戸送り（『日本永代蔵』二の四「天狗は家名の風車」に見える鯛の腹に針を指す輸送方法）の記事についての書きとめがあることなど、三つの例を紹介して、「校訂作業上、こういう語彙考証の不断につづけられたことは容易に想像がつく」としている。ただし本稿では、日記や私信に見られるのみで公刊されなかった考証成果について

は、考察対象から外すこととする。

(4)「ノート（1）」参照。

(5)『西鶴文集』は、昭和5年4月重版された際、大阪の吉田祥三郎氏所蔵本により第五巻を追補している。

(6)宮澤照恵「研究史を知る『西鶴諸国はなし』『西鶴と浮世草子研究』1笠間書院　平成18年6月

(7)以下に掲載の各典拠一覧。

江本裕『西鶴諸国はなし』桜楓社　昭和51年4月

江本裕・谷脇理史編『西鶴事典』「出典一覧（川元ひとみ編）」おうふう　平成8年12月

江本裕「『西鶴諸国はなし』における説話的発想」昭和17年7月『近世文芸』8（『西鶴研究―小説篇』新典社　所収）

(8)伝承からの飛躍に注目したのが江本裕の以下の一連の論考である。

昭和38年11月　江本裕「西鶴諸国はなし――説話的発想について」『近世文芸』8

昭和42年2月　江本裕「西鶴小説における『説話性』について」『国文学論考』4

昭和48年8月　江本裕「西鶴に於ける説話的方法の意義―雑話物を中心として」『国語国文学研究』1

(9)明治23年5月　幸田露伴「井原西鶴」『国民之友』に、「人の心内の現象を其のまゝ実事の如く写し出せる場合を以て多しとなす、写実派と云はむこと当れるに近かるべし」とある。魯庵や露伴らが指摘した西鶴の写実性は、その後の西鶴研究に様々な形で継承され、影響を与える。

(10)昭和40年以降、井上敏幸・宗政五十緒・江本裕らによって、『西鶴諸国はなし』の虚構性に注目した典拠研究が進展を見せた。井上は、俳諧師としての西鶴の創作手法を作品に即して解き明かし、宗政は趣向の解明に特色を見せた。江本は共通理解としての説話伝承素材に興味を示し、そこから飛躍して独立した咄を創り出しているとした。こうした西鶴のフィクション化に注目していく発想はいつ頃に芽生え、どのような経過を辿ってきたのか、その筋道を戦前に逆上って明らかにしようとするものである。

(11)この傾向は俳諧性の指摘について見ると、より顕著である。近藤忠義の『西鶴』本文編についてみれば、近藤自身は説話素材の「当世化」・「近世化」・「滑稽化」といった西鶴の操作を十分に認識していることが見て取れる。しかし奇妙なことに、これらの気付きは「人間復興・人間性への目覚め・封建社会への抵抗」といった理論にすべて吸収されていってしまう。個々の作品の読みとは別に、当世のありのままの人間を描くという発見とそれに対する賛美が大前提としてあり、そこにこそ西鶴文学の価値があるとするあまりに、個別の作品の読みによる発見が全て「人間主義的作品」・「人間復興の文学」という一つの方向へ収束していったと思われる。なお、詳しくは次稿「戦前研究史ノート（3）」で論ずる予定である。

(12)「大下馬ところどころ」（論考9）参照。

引用文献書誌一覧

注に記載した文献を除き、項目に沿ってほぼ紹介順に列記する。なお、◇印は『西鶴研究資料集成』（平成5　クレス出版）による。

一．本稿の目的

平成19年3月「『西鶴諸国はなし』研究史ノート（1）」『北星学園大学文学部　北星論集』47

二．戦前の典拠研究概観

明治32年2月　幸田露伴「六十日記」『現代日本文学全集3　幸田露伴集』筑摩書房　昭和29年

大正15年4月―昭和7年『西鶴輪講』　三田村鳶魚らによる『好色五人女』第一回輪講は『彗星』第一年4回・5回に掲載（以後、昭和7年まで）。（『西鶴輪講』青蛙房）。京都の藤井乙男・顕原退蔵らによる輪講は昭和6年1月―12月。『上方』に掲載。

◇明治30年7月　淡島寒月　「好色一代女（合評）」『めさまし草』（寒月の発言を「同人氏」が合評の席にて紹介したもの）

◇明治30年7月　森田思軒　「標新領異録」『めさまし草』

（三九）

大正11年5月　鈴木敏也　「諸国咄」『近世日本小説史前』　目黒書店（二篇4章1節）
大正13年11月　船越政一郎　「鴻池新田と文豪西鶴の大下馬」『難波津』10
大正15年3月　片岡良一　「懐硯と大下馬」『井原西鶴』至文堂　（4章6節の3）
昭和3年5月　岩城準太郎　「西鶴の諸国咄と大和」『奈良文化』14
昭和4年5月　水谷不倒　『新撰列伝体小説史』春陽堂（『水谷不倒著作集』1　中央公論社　昭和49年）
昭和8年9月　前島春三　「西鶴と『諸国咄』」『国語と国文学』10の9
昭和10年11月　近藤忠義　「大下馬ところどころ」『国文学誌要』（『日本　文学論（一）』に収録。『近世小説と俳諧』に再録。）
昭和11年2月　近藤忠義　「西鶴諸国咄論稿」『近世文学の研究』至文堂
昭和12年2月　近藤忠義　『日本文学原論』法政大学出版局　（5章）
昭和12年2月―13年1月、18年1月　真山青果　「西鶴語彙考証」『中央演劇』（木村秀花編）及び『西鶴研究』3（昭和18・1）に分載、昭和23年刊行。（昭和51年8月『真山青果全集』16　講談社）
昭和14年10月　重友　毅　「西鶴と秋成」『古典研究』4の10
昭和17年12月　鈴木敏也　「草の種」『西鶴研究』2　西鶴学会
昭和17年12月　後藤興善　「『古今著聞集』と西鶴の説話」『西鶴研究』2　西鶴学会
大正2年　藤井紫影　『西鶴文集　上』有朋堂文庫
昭和4年9月　土井重義責任校訂　『井原西鶴集』（新釈日本文学叢書）日本文学叢書刊行会
昭和7年2月　山崎麓　『西鶴文撰集』春陽堂
昭和14年　近藤忠義　『西鶴』（日本古典読本）日本評論社

三、典拠論の諸相とプライオリティー

昭和37年11月　江本裕　「『西鶴諸国はなし』における説話的発想について」『近世文芸』8（『西鶴研究―小説篇』平成17年7月　新典社）
昭和17年　後藤興善　「『古今著聞集』と西鶴の説話」『西鶴研究』2
昭和44年4月　宗政五十緒　「西鶴諸国はなしのあとさき」『西鶴の研究』未来社
平成17年9月　宮澤照恵　「『西鶴諸国はなし』咄の創作―見せぬ所は女大工の構想をめぐって」『北星学園大学文学部　北星論集』43―1
昭和29年1月　早川光三郎　「西鶴文学と中国説話」『滋賀大学学芸学部紀要』3
昭和32年4月　岸得蔵　「『西鶴諸国はなし』考―その出生をたずねて」『国語国文』26―4（『仮名草子と西鶴』成文堂　昭和49年）
昭和51年10月　井上敏幸　「『西鶴諸国はなし』攷―仙境譚と武家物」『国語国文』45―10
平成2年3月　藤江峰夫　「西鶴の咄の種―『西鶴諸国はなし』中の三篇をめぐって」『玉藻』25
昭和49年　重友毅　「『西鶴諸国咄』二題」『重友毅著作集』1　文理書院
昭和48年7月　岡雅彦　「西鶴名残の友と咄本」『近世文芸』22
昭和44年4月　野田寿雄　『校註　西鶴諸国咄』笠間書院
昭和31年11月　笠井清　「西鶴の剪燈新話系説話」『復刊西鶴研究』9
昭和38年　堤精二　「『近年諸国咄』の成立過程」『近世小説　研究と資料』　至文堂
昭和33年5月　森山重雄　「咄の伝統と西鶴」『文学』（『封建庶民文学の研究』　三一書房　昭和35年）
平成12年4月　宮澤照恵　「『西鶴諸国はなし』大下馬の原質（一）」『江戸の文事』ぺりかん社
平成14年3月　宮澤照恵　「『西鶴諸国はなし』大下馬の原質（二）―軽口咄の方法」『北星学園大学文学部　北星論集』39
平成元年3月　宮澤照恵　「楽しみの鱆鮎の手の素材と方法―『西鶴諸国はなし』の研究」『国語国文研究』82
昭和35年11月　近藤忠義　「西鶴大下馬の原話一、二話」『文学』
昭和44年3月　冨士昭雄　「西鶴の素材と方法」『駒沢大学文学部研究紀要』27
昭和24年　後藤興善　「西鶴説話の一考察――狂言「六人僧」から」『復刊西鶴研究』2

（四〇）

［Abstract］

Re-examining Studies of "*Saikaku Shokoku Hanashi*" No. 2: Historical Investigation of Vocabulary and Sources before 1945

Terue MIYAZAWA

Through the process of arranging Pre-World War II source studies of *Saikaku Shokoku Hanashi*, the author concludes that source theory requires discovering the author's purpose and intentions and clarifying the process of fictionalizing. Three main results are drawn from this study. First, the results of overlooked pre-war materials theories and source theories were uncovered, arranged in chronological order, and summarized according to their significance and limits. Second, based on these results, priorities were established. Third, the relationship between the current thought of each period and the various source theories was considered, and various contradictions were made clear. A list of references is included at the end of this study.

Key Words: Study of Sources, Priority, Evidence from Vocabulary